

はちの医師会の手紙

NO. 656

令和6年2月20日

八戸市医師会



巻頭言 子ども一人ひとりの居場所づくりに向けて

(表紙題字：元八戸市医師会理事 小坂 康美)

目 次

| | | |
|-----------------------------|-------|-------------------|
| 表紙絵解説 | 大池 薫 | 2 |
| ☆巻頭言☆ 子ども一人ひとりの居場所づくりに向けて | 齋藤 信哉 | 3 |
| 令和6年1月定例理事会 | | 4 |
| 令和6年八戸市医師会新年互礼会 | | 17 |
| 令和5年に表彰された先生方 | | 22 |
| 受賞者のよろこび | | 23 |
| ☆学 術☆ | | |
| 八戸リウマチ研究会講演会 | | 30 |
| 八戸精神科医会 | | 31 |
| 第71回日本職業・災害医学会学術大会 | | 32・33 |
| 健康教室 | | 35 |
| 八戸市休日夜間急病診療所利用状況 | | 37 |
| インボイス制度と消費税の話 ～深い闇だあ～ | 真鍋 宏 | 38 |
| ドイツ留学思い出昔話44. | | |
| ドイツ留学に際して指導・支援して下さった恩人たち(1) | | |
| (小島尚先生, 伊藤實先生) | 橋本 功 | 42 |
| 令和6年能登半島地震関連記事 | | |
| デーリー東北新聞社提供 | | 44・45・46・47・48・49 |
| 研修～リレー日誌～ | | 50・51・52 |
| 会員消息 | | 54 |
| 事務局日誌メモ | | 55 |
| 行事予定 | | 56 |
| 広報委員会より | | 56 |
| 編集後記 | | 56 |

表紙絵解説

2月 えんぶり

いちばん寒い頃にえんぶりが始まります。昨年、かがり火とえんぶりの舞を撮りたいと市庁前に行ったのですが、中々その場面に出くわさず、半分諦めて雪が積んであった所に立って眺めていると、なんと目の前の篝火の周りで舞い始めたではありませんか。こんな幸運なことは滅多にないと夢中でシャッターを切りました。

(大池 薫)

巻 頭 言

子ども一人ひとりの居場所づくりに向けて

八戸市教育委員会 教育長

齋 藤 信 哉

令和の日本型学校教育では、一人ひとりの子どもたちの可能性を引き出すために「個別最適な学び」とともに「協働的な学び」の必要性が示されたところであります。

しかしながら、これらを体現する上で大きな障害となっていることの一つに、不登校問題が挙げられます。令和5年10月に文部科学省が公表した「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によりますと、全国の小・中学校における不登校児童生徒数は299,048人であり、前年度から54,108人増加し、過去最多となりました。

当市においても年間30日以上欠席した、いわゆる不登校児童生徒の数は、令和2年度351人、3年度421人、4年度479人と増加傾向にあり、全国と同様の傾向が見られます。

当市では不登校児童生徒の約1割に当たる子どもたちが「こども支援センター」内にある適応指導教室に通室しております。

また同センターでは、不登校を主訴とする相談にも対応しており、今年度10月末現在で小学生50人、中学生85人の保護者からの相談を受けており、相談件数は延べ1,345件に及んでおります。

不登校にある子どもをもつ保護者の多くは、子育てに自信がもてず「育て方を間違えたのでは」と罪悪感に苛まれたり、子どもへの関わり方について悩みを抱えていたりする傾向が見られます。このような悩みを抱える保護者に、きめ細やかに寄り添うことで子どもも救われるケースが少なくありません。対応に当たる教育相談員は、一人ひとりの保護者に対してこれまでの頑張りを労い、苦しい思いに共感することで不安の解消や、子育てに対し自信を回復できるように、誠心誠意、支援に努めています。

また、こども支援センター以外の残りの約9割の不登校児童生徒は在籍校において、校内適応指導教室や保健室等を利用して落ち着いた空間の中で自分に合ったペースで学習や生活ができるよう、状況に応じた支援を受けています。

中には1人1台端末を活用して、教室以外の別室や自宅からオンラインで授業に参加したり、学級担任や友達とオンライン上で交流したりする児童生徒もおります。

全国的に学校内外の専門機関等で相談や指導を受けていない児童生徒が過去最多となっており、文部科学省ではその対策として、学校と家庭が「フリースクール」や「学びの多様化学校」を含めた関係機関と積極的に連携し、不登校児童生徒が学びたいと思った時に学べる学校以外に第二の居場所づくりに努めることが重要であると提言しております。

また学校に登校している児童生徒の中でも、様々な悩みや困り感をもっている場合が少なくないため、全ての子どもたちのSOSに周囲の大人がいかに早く気づくかが重要なポイントであると唱えています。

新型コロナウイルス感染症が5類に移行され、子どもたちの生活もコロナ禍前に戻りつつありますが、制限が緩和されたことにより生きづらさを感じている子どもがいるのも事実であります。

市教育委員会では、それぞれが抱える様々な不安や悩みに寄り添い、一人ひとりの子どもたちが安心して過ごすことができる居場所づくりに、引き続き、取り組んでまいります。

八戸市医師会の皆様には、これまで同様のご支援・ご教示を賜りますようお願い申し上げます。